

黒牟田（くろむた）と応法（おうぼう）・丸尾（まるお）の煙突群

江戸（えど）時代（1603～1867）、黒牟田・応法地区は泉山（いずみやま）近くの内山（うちやま）地区より西の外山（そとやま）地区にあった。外山で生産された磁器は他と比べて品質が劣ったため、欧州ではなく東南アジアへ輸出されることが多かった。

黒牟田では、有田町でも最古の部類に入る登り窯跡がいくつか見つかっている。17世紀初めに作られた山辺田（やんべた）窯跡は、有田における磁器生産の発展に関する重要な情報源であるとして、国の史跡に指定された。1998年と、2013年から2015年に行われた考古学調査による発見から、山辺田は色絵磁器が国内で最初に生産された場所のひとつだったと考えられている。

応法地区はレンガ煙突が点在することで知られている。大部分が明治（めいじ）時代（1868～1912）に作られ、その歴史的価値や趣が評価され保存されてきた。生産方法が薪から石炭や重油、そしてガス窯へと変わっていったため、これらの煙突は廃れていった。猪子谷（ちよこだに）窯という20世紀初めに作られた単室石炭窯は、もともとは共同窯だったが、1937年以前のどこかで個人所有となった。その後すぐに時代にそぐわなくなり、1998年に有田町の史跡に指定されるまでは荒れ果てた状態であった。一部が修理され、現在は有田の磁器生産の近代化に関する情報を知ることができる貴重な場所となっている。